校異源氏物語・まきはしら

内にきこしめさむこともかしこししはし人にあまねくもらさしといさめきこえ給へとさしもえつゝみあへたまはすほとふれといさゝかうちとけたる御けしきもなく思はすにうきすくせなりけりと思ひいり給へるさまのたゆみなきをいみしうつらしと思へとおほろけならぬ契のほとあはれにうれしく思みるまゝにめてたくおもふさまなる御かたちありさまをよそのものにみはてゝやみなましよと思たにむねつふれていし山のほとけをも弁のおもとをもならへていたゝかまほしうおもへと女君のふかくものしとうとみにけれはえましらはてこもりゐにけりけにそこら心くるしけなることゝもをとり　くにみしかと心あさき人のためにそてらのけんもあらはれけるおとゝも心ゆかすくちおしとおほせといふかひなき事にてたれも　くかくゆるしそめ給へることなれはひきかへしゆるさぬけしきをみせむも人のためいとおしうあいなしとおほしてきしきいとになくもてかしつき給いつしかとわか殿にわたいたてまつらんことを思いそき給へとかる　くしくふとうちとけわたり給はんにかしこにまちとりてよくもおもふましき人のものし給なるかいとおしさにことつけ給てなを心のとかになたらかなるさまにてをとなくいつかたにも人のそしりうらみなかるへくをもてなし給へとそきこえ給ちゝおとゝは中　くめやすかめりことにこまかなるうしろみなき人のなまほのすいたる宮つかへにいて立てくるしけにやあらむとそうしろめたかりし心さしはありなから女御かくてものし給をゝきていかゝもてなさましなとしのひての給けりけにみかとゝきこゆとも人におほしおとしはかなき程にみえたてまつり給てもの　くしくもゝてなし給はすはあはつけきやうにもあへかりけり三日の夜の御せうそこともきこえかはし給けるけしきをつたへきゝ給てなむこのおとゝのきみの御心をあはれにかたしけなくありかたしとはおもひきこえ給けるかうしのひ給御なからひのことなれとをのつから人のおかしきことにかたりつたへつゝつき　くにきゝもらしつゝありかたきよかたりにそさゝめきける内にもきこしめしてけりくちおしうすくせことなりける人なれとさおほしほいもあるを宮つかへなとかけ　くしきすちならはこそは思たえ給はめなとの給はせけりしも月になりぬ神わさなとしけくないし所にもことおほかるころ

にて女くわんとも内侍ともまいりつゝいまめかしう人さはかしきに大将殿ひるもいとかくろへたるさまにもてなしてこもりおはするをいと心つきなくかむの君はおほしたり宮なとはまいていみしうくちおしとおほす兵衛の督はいもうとの北の方の御ことをさへ人わらへにおもひなけきてとりかさね物おもほしけれとおこかましううらみよりてもいまはかひなしと思かへす大将はなにたてるまめ人のとし比いさゝかみたれたるふるまひなくてすくし給へるなこりなく心ゆきてあらさりしさまにこのましうよひあか月のうちしのひ給へるいていりもえんにしなし給へるをおかしと人　くみたてまつる女はわらゝかににきはゝしくもてなし給本上もゝてかくしていたう思むすほゝれ心もてあかぬさまはしるきことなれとおとゝのおほすらむこと宮の御心さまの心ふかうなさけ　くしうおはせしなとを思いて給にはつかしうくちおしうのみおもほすにもの心つきなき御けしきたえす殿もいとおしう人　くも思うたかひけるすちを心きよくあらはし給て我心なからうちつけにねちけたることはこのますかしとむかしよりのこともおほしいてゝむらさきのうへにもおほしうたかひたりしよなときこえ給いまさらに人の心くせもこそとおほしなから物のくるしうおほされし時さてもやとおほしより給しことなれはなをおほしもたえす大将のおはせぬひるつかたわたり給へり女君あやしうなやましけにのみもてなひ給てすくよかなるおりもなくしほれ給へるをかくてわたり給へれはすこしをきあかり給て御木丁にはたかくれておはす殿もよういことにすこしけゝしきさまにもてない給ておほかたのこととともなときこえ給すくよかなる世のつねの人にならひてはましていふかたなき御けはひありさまをみしり給にも思ひのほかなる身のをき所なくはつかしきにも涙そこほれけるやう　くこまやかなる御物かたりになりてちかき御けうそくによりかゝりてすこしのそきつゝきこえ給いとおかしけにおもやせ給へるさまのみまほしうらうたい事のそひたまへるにつけてもよそにみはなつもあまりなる心のすさひそかしとくちおし

おりたちてくみはみねともわたり川人のせとはたちきらさりしをおもひのほかなりやとてはなうちかみ給ふけはひなつかしうあはれなりをんなはかほをかくして

みつせ川わたらぬさきにいかてなを涙のみをのあはときえなん心おさなの御きえところやさてもかのせはよきみちなかなるを御てのさきはかりはひきたすけきこえてんやとほゝゑみ給てまめやかにはおほしゝることもあらむかしよになきしれ　くしさも又うしろやすさもこの世にたくひなきほとをさりともと

なんたのもしきときこえ給をいとわりなうきゝくるしとおほいたれはいとおしうての給まきらはしつゝ内にの給はすることなむいとおしきを猶あからさまにまひらせたてまつらんをのか物とりやうしはてゝはさやうの御ましらひもかたけなめるよなめり思そめきこえし心はたかふさまなめれと二条のおとゝは心ゆき給なれは心やすくなむなとこまかにきこえ給あはれにもはつかしくもきゝ給ことおほかれとたゝ涙にまつはれておはすいとかうおほしたるさまのこゝろくるしけれはおほすさまにもみたれ給はすたゝあるへきやう御心つかひをゝしへきこえ給かしこにわたり給はん事をとみにもゆるしきこえ給ましき御けしきなり内へまいり給はむことをやすからぬことに大将おほせとそのついてにやまかてさせたてまつらんの御心つき給てたゝあからさまの程をゆるしきこえ給かくしのひかくろへ給御ふるまひもならひ給はぬ心ちにくるしけれは我とのゝうちすりししつらひて年比はあらしうつもれうちすて給へりつる御しつらひよろつのきしきをあらためいそき給きたの方のおほしなけくらむ御心もしり給はすかなしうし給し君たちをもめにもとめ給はすなよひかになさけ　くしき心うちましりたる人こそとさまかうさまにつけても人のためはちかましからんことをはおしはかり思ふところもありけれひたおもむきにすくみ給へる御心にて人の御心うこきぬへきことおほかり女君人におとり給へきことなし人の御本上もさるやんことなきちゝみこのいみしうかしつきたてまつり給へるおほえよにかろからす御かたちなともいとようおはしけるをあやしうしふねき御物のけにわつらひ給てこのとしころ人にもに給はすうつし心なきおり　くおほく物し給て御中もあくかれてほとへにけれとやむことなき物とはまたならふ人なく思きこえ給へるをめつらしう御心移る方のなのめにたにあらす人にすくれ給へる御ありさまよりもかのうたかひをきてみな人のおしはかりしことさへ心きよくてすくい給けるなとを有かたうあはれと思ましきこえ給もことはりになむ式部卿の宮きこしめしていまはしかいまめかしき人をわたしてもてかしつかんかたすみに人わろくてそひ物し給はむも人きゝやさしかるへしをのかあらむこなたはいと人わらへなるさまにしたかひなひかてもゝのし給なんとのたまひてみやのひんかしのたいをはらひしつらひてわたしたてまつらんとおほしの給をおやの御あたりといひなからいまはかきりの身にてたちかへりみえたてまつらむことゝ思みたれ給にいとゝ御心地もあやまりてうちはへふしわつらひ給本上はいとしつかに心よくこめき給へる人の時　く心あやまりして人にうとまれぬへきことなんうちましり給ひけるすまひなとのあやしうしとけなく物のきよらもなくやつし

ていとむもれいたくもてなし給へるをたまをみかけるめうつしに心もとまらねととしころの心さしひきかふる物ならねは心にはいとあはれと思ひきこえ給きのふけふのいとあさはかなる人の御なからひたによろしきゝはになれはみなおもひのとむるかたありてこそみはつなれいと身もくるしけにもてなし給つれはきこゆへきこともうちいてきこえにくゝなむとしころ契きこゆることにはあらすやよの人にもにぬ御ありさまをみたてまつりはてんとこそはこゝら思ひしつめつゝすくしくるにえさしもありはつましき御心をきてにおほしうとむなをさなき人　くも侍れはとさまかうさまにつけてをろかにはあらしときこえわたるを女の御心のみたりかはしきままにかくうらみわたり給ひとわたりみはて給はぬほとさもありぬへきことなれとまかせてこそいましはし御らんしはてめ宮のきこしめしうとみてさはやかにふとわたしたてまつりてむとおほしの給なんかへりていとかる　くしきまことにおほしをきつることにやあらむしはしかうしゝ給へきにやあらむとうちわらひての給へるいとねたけに心やまし御めしうとたちてつかうまつりなれたるもくの君中将のおもとなといふ人　くたに程につけつゝやすからすつらしと思ひきこえたるをきたの方はうつし心ものし給ほとにていとなつかしうゝちなきてゐ給へり身つからをほけたりひか　くしとの給はちしむるはことはりなることになむ宮の御ことをさへとりませの給うもりきゝ給はんはいとおしううき身のゆかりかる　くしきやうなるみゝなれにて侍れはいまはしめていかにもものを思ひ侍らすとてうちそむき給へるらうたけなりいとさゝやかなる人のつねの御なやみにやせおとろへひわつにてかみいとけうらにてなかゝりけるかわけたるやうにおちほそりてけつることもおさ　くし給はすなみたにまつはれたるはいとあはれなりこまかにゝほへるところはなくてちゝ宮ににたてまつりてなまめいたるかたちし給へるをもてやつし給へれはいつこのはなやかなるけはひかはあらむ宮の御ことをかろくはいかゝきこゆるおそろしう人きゝかたはにはになの給なしそとこしらへてかのかよひ侍所のいとまはゆきたまのうてなにうひ　くしうきすくなるさまにていているほともかた　くに人めたつらんとかたはらいたけれは心やすくうつろはしてんと思侍るなりおほきおとゝのさる世にたくひなき御おほえをはさらにもきこえす心はつかしういたりふかうおはすめる御あたりににくけなることもりきこえはいとなんいとおしうかたしけなかるへきなたらかにて御中よくてかたらひてものし給へ宮にわたり給へりともわするゝ事は侍らしとてもかうてもいまさらに心さしのへたゝることはあるましけれとよのきこえ人わらへにまろかためにもかろ　くしう

なむ侍るへきをとしころのちきりたかへすかたみにうしろみむとおほせとこしらへきこえ給へは人の御つらさはともかくもしりきこえすよの人にもにぬ身のうきをなむ宮にもおほしなけきていまさらに人わらへなることゝ御心をみたり給なれはいとおしういかてかみえたてまつらんとなむ大殿の北の方ときこゆるもこと人にやは物し給かれはしらぬさまにておいゝて給へる人のするゑの世にかく人のおやたちもてない給つらさをなんおもほしの給なれとこゝにはともかくもおもはすやもてない給はんさまをみるはかりとの給へはいとようの給をれいの御心たかひにやくるしきこともいてこむ大殿の北方のしり給事にも侍らすいつきむすめのやうにて物し給へはかくおもひおとされたる人のうへまてはしり給なんや人の御おやけなくこそものし給へかめれかゝることのきこえあらはいとゝくるしかへきことなと日ゝとひいりゐてかたらひ申給くれぬれは心もそらにうきたちていかていてなんとおもほすに雪かきたれてふるかゝるそらにふりいてむも人めいとおしうこの御けしきもにくけにふすへうらみなとし給はゝ中

くことつけて我もむかひ火つくりてあるへきをいとをひらかにつれなうもてなし給へるさまのいと心くるしけれはいかにせむとおもひみたれつゝかうしなともさなからはしちかううちなかめてゐ給へり北の方けしきをみてあやにくなめる雪をいかてわけ給はんとすらむよもふけぬめりやとそゝのかし給いまはかきりとゝむともと思ひめくらし給へる気色いとあはれなりかゝるにはいかてかとの給ものからなをこのころはかり心の程をしらてとかく人のいひなしおとゝたちもひたり右にきゝおほさんことをはゝかりてなんとたえあらむはいとおしき思ひしつめて猶みはてたまへこゝになとわたしては心やすく侍なむかくよのつねなる御気色みえ給時はほかさまにわくる心もうせてなんあはれに思ひきこゆるなとかたらひ給へは立とまり給ても御心のほかならんは中　くくるしうこそあるへけれよそにても思たにをこせ給はゝ袖のこほりもとけなんかしなとなこやかにいひゐ給へり御ひとりめしていよ　くたきしめさせたてまつり給身つからはなえたる御そともうちとけたる御すかたいとゝほそうかよはけなりしめりておはするいと心くるし御めのいたうなきはれたるそすこし物しけれといとあはれとみる時はつみなうおほしていかてすくしつるとし月そとなこりなううつろふ心のいとかろきそやとは思ふ　くなを心けさうはすゝみてそらなけきをうちしつゝなをさうそくし給てちいさきひとりとりよせて袖にひきいれてしゐ給へりなつかしき程になえたる御さうそくにかたちもかのならひなき御光にこそおさるれといとあさやかにおをしきさましてたゝ人とみえす心はつかしけな

りさふらひに人　くこゑして雪すこしひまあり夜はふけぬらんかしなとさすか
にまほにはあらてそゝのかしきこえてこはつくりあへり中将もくなとあはれの
よやなとうちなけきつゝかたらひてふしたるにさうしみはいみしう思ひしつめ
てらうたけによりふし給へりとみる程にゝはかにおきあかりておほきなるこの
したなりつるひとりをとりよせてとのゝうしろによりてさといかけ給ほと人の
やゝみあふる程もなうあさましきにあきれて物し給さるこまかなるはゐのめは
なにもいりておほゝれて物もおほえすはらひすて給へとたちみちたれは御そと
もぬき給つうつし心にてかくし給そと思はゝ又かへりみすへくもあらすあさま
しけれとれいの御ものゝけの人にうとませむとするわさと御前なる人〳〵もいと
おしうみたてまつるたちさはきて御そともたてまつりかへなとすれとそこらの
はいのひんのわたりにもたちのほりよろつの所にみちたる心ちすれはきよらを
つくし給わたりにさなからまうてたまふへきにもあらす心たかひとはいひなか
らなをめつらしうみしらぬ人の御有さまなりやとつまはしきせられうとましう
なりてあはれと思つる心ものこらねとこのころあらたてゝはいみしきこといて
きなむとおほししつめてよなかになりぬれとそうなとめしてかちまいりさはく
よはゐのゝしり給こゑなと思ひうとみ給はんにことはりなりよ一夜うたれひか
れなきまとひあかし給てすこしうちやすみ給へる程にかしこへ御文たてまつれ
給よへにはかにきえいる人のはへしによりゆきの気色もふりいてかたくやすら
ひはへしに身さへひえてなむ御心をはさる物にて人いかにとりなし侍けんとき
すくにかき給へり

　心さへそらにみたれし雪もよにひとりさえつるかたしきの袖たえかたくこ
そとしろきうすやうにつゝやかにかい給へれとことにおかしきところもなして
はいときよけなりさえかしこくなとそものし給けるかむの君よかれをなにとも
おほされぬにかく心ときめきし給へるをみもいれ給はねは御かへりなしおとこ
むねつふれて思くらし給北方は猶いとくるしけにし給へはみす法なとはしめさ
せ給心のうちにもこの比はかりたにことなくうつし心にあらせ給へとねんし給
まことの心はへのあはれなるをみすしらすはかうまておもひすくすへくもなき
けうとさかなとおもひゐ給へりくるれはれいのいそきいて給御さうそくの事な
ともめやすくしなしたまはすよにあやしうゝちあはぬさまにのみむつかり給を
あさやかなる御なをしなともえとりあへ給はていとみくるしよへのはやけとを
りてうとましけにこかれたるにほひなともことやうなり御そともにうつりかも
しみたりふすへられける程あらはに人もうし給ぬへけれはぬきかへて御ゆとの

なといたうつくろひ給もくの君御たきものしつゝ

ひとりゐてこかるゝむねのくるしきに思ひあまれるほのをとそみしなこりなき御もてなしはみたてまつる人たにたたにやはとくちおほひてゐたるまみいといたしされといかなる心にてかやうの人に物をいひけんなとのみそおほえ給けるなさけなきことよ

うきことを思ひさはけはさま　くにくゆるけふりそいとゝたちそふいとことのほかなることゝものもしきこえあらはちうけんになりぬへき身なめりとうちなけきていて給ぬ一夜はかりのへたてたにまためつらしうおかしさまさりておほえ給ありさまにいとゝ心をわくへくもあらすおほえて心うけれはひさしうこもりゐ給へりすほうなとしさはけと御ものゝけこちたくおこりてのゝしるをきゝ給へはあるましきゝすもつきはちかましき事かならすありなんとおそろしうてよりつき給はす殿にわたり給時もことかたにはなれゐ給てきみたちはかりをそよひはなちてみたてまつり給女ひとゝころ十二三はかりにてまたつき　くおとこふたりなんおははしけるちかきとしころとなりては御中もへたゝりかちにてならはし給へれとやむことなうたちならふかたなくてならひ給へれはいまはかきりとみ給に候ふ人　くもいみしうかなしとおもふちゝ宮きゝ給ていまはしかかけはなれてもていて給らむにさて心つよくものし給いとをもなう人わらへなる事なりをのかあらむよのかきりはひたふるにしもなとかしたかひくつをれたまはむときこえ給てにはかに御むかへあり北方御心地すこしれいになりてよの中をあさましう思なけき給にかくときこえ給へれはしいてたちとまりて人のたえはてんさまをみはてゝ思とちめむもいますこし人わらへにこそあらめなとおほしたつ御せうとの君たち兵衛督はかん達部におはすれはこと　くしとて中将侍従民部大輔なと御車三はかりしておはしたりさこそはあへかめれとかねて思つることなれとさしあたりてけふをかきりとおもへは候ふ人　くもほろ　くとなきあへりとしころならひ給はぬ旅すみにせはくはしたなくてはいかてかあまたは候はんかたへはをの　くさとにまかてゝしつまらせ給なむになとさためて人　くをのかしゝはかなき物ともなとさとにはらひやりつゝみたれちるへし御てうとゝもはさるへきはみなしたゝめをきなとするまゝにかみしもなきさはきたるはいとゆゆしくみゆ君たちはなに心もなくてありき給をはゝきみみなよひするゑ給て身つからはかく心うきすくせいまはみはてつれはこの世にあとゝむへきにもあらすともかくもさすらへなんおいさきとをうてさすかにちりほひ給はんありさまとものかなしうもあへいかなひめ君はとなるともかうなるともを

のれにそひ給へ中　くおとこ君たちはえさらすまうてかよひみえたてまつらん
に人の心とゝめ給へくもあらすはしたなうてこそたゝよはめ宮のおはせんほと
かたのやうにましらひをすともかのおとゝたちの御心にかゝれる世にてかく心
をくへきわたりそとさすかにしられて人にもなりたゝむことかたしさりとて山
はやしにひきつゝきましらむ事のちの世まていみしきことゝなき給にみなふか
き心は思わかねとうちひそみてなきおはさうすむかし物語なとをみるにもよの
つねの心さしふかきおやたに時にうつろひ人にしたかへはおろかにのみこそな
りけれましてかたのやうにてみるまへにたに名残なきこゝろはかかり所ありて
もゝてない給はしと御めのとゝもさしつとひての給なけく日もくれゆきふりぬ
へき空の気色も心ほそうみゆる夕へなりいたうあれ侍なんはやうと御むかへの
きんたちそゝのかしきこえて御めをしのこひつゝなかめおはすひめ君は殿いと
かなしうしたてまつり給ならひにみたてまつらてはいかてかあらむいまなとも
きこえてまたあひみぬやうもこそあれとおもほすにうつふし　くてえわたるま
しとおもほしたるをかくおほしたるなんいと心うきなとこしらへきこえ給たゝ
いまもわたり給はなんとまちきこえ給へとかくくれなむにまさにうこき給なん
やつねによりゐ給ひんかしおもてのはしらを人にゆつる心ちし給もあはれにて
ひめ君ひわた色のかみのかさねたゝいさゝかにかきてはしらのひはれたるはさ
まにかうかいのさきしておしいれ給

　いまはとてやとかれぬともなれきつるまきのはしらはわれをわするなえも
かきやらてなき給はゝ君いてやとて

　なれきとはおもひいつともなにゝよりたちとまるへきまきの柱そ御前なる
人ゝもさま　くにかなしくさしも思はぬ木草のもとさへ恋しからんことゝめと
ゝめてはなすゝりあへりもくの君は殿の御方の人にてとゝまるに中将のおもと

　あさけれといし間の水はすみはてゝやともる君やかけはなるへき思かけさ
りしことなりかくてわかれたてまつらんことよといへはもく

　ともかくもいはまの水のむすほゝれかけとむへくもおもほえぬよをいてや
とてうちなく御くるまひきいてゝかへりみるもまたはいかてかはみむとはかな
き心地す木するゑをもめとゝめてかくるゝまてそかへりみ給けるきみかすむゆへ
にはあらてこゝらとしへ給へる御すみかのいかてかしのひところなくはあらむ
宮にはまちとりいみしうおほしたりはゝきたのかたなきさはき給ておほきおと
ゝをめてたきよすかと思きこえ給へれといかはかりのむかしのあたかたきにか
おはしけむとこそおもほゆれ女御をもことにふれはしたなくもてなし給しかと

それは御中のうらみとけさりし程思しれとにこそはありけめとおほしの給よの
人もいひなししたになをさやはあるへき人ひとりを思かしつき給はんゆへはほ
とりまてもにほふためしこそあれと心えさりしをましてかくするゑにすゝろなる
まゝこかしつきをしてをのれふるし給へるいとおしみにしほうなる人のゆき所
あるましきをとてとりよせもてかしつき給はいかゝつらからぬといひつゝけの
ゝしり給へは宮はあなきゝにくやよになむつけられ給はぬおとゝをくちにまか
せてなおとしめ給そかしこき人は思ひをきかゝるむくひもかなとおもふことこ
そはものせられけめさおもはるる我身のふかうなるにこそはあらめつれなうて
みなかのしつみ給しよのむくひはうかへしつめいとかしこくこそは思わたい給
めれをのれひとりをはさるへきゆかりと思てこそはひとゝせもさる世のひゝき
に家よりあまることゝもゝありしかそれをこの生のめいほくにてやみぬへきな
めりとの給にいよ　くはらたちてまか　くしきことなとをいひちらし給このお
ほきたのかたそさかな物なりける大将の君かくわたり給にけるをきゝていとあ
やしうわか　くしきなからひのやうにふすへかほにて物し給けるかなさうしみ
はしかひきゝりにきは　くしき心もなき物を宮のかくかる　くしうおはすると
思てきむたちもあり人めもいとおしきに思みたれてかむのきみにかくあやしき
ことなん侍る中　くこゝろやすくは思給なせとさてかたすみにかくろへてもあ
りぬへき人の心やすさをおたしう思給へつるにゝはかにかの宮ものし給ならむ
人のきゝみることもなさけなきをうちほのめきてまいりきなむとていて給よき
うへの御そやなきのしたかさねあをにひのきのさしぬきゝ給てひきつくろひ給
へるいとものの　くしなとかはにけなからむと人　くはみたてまつるをかむの君
はかゝることゝもをきゝ給につけても身の心つきなうおほししらるれはみもや
り給はす宮にうらみきこえむとてまうて給まゝにまつとのにおはしたれはもく
の君なといてきてありしさまかたりきこゆひめきみの御ありさまきゝ給てをゝ
しくねんし給へとほろ　くとこほるゝ御気色いとあはれなりさてもよの人にも
にすあやしき事ともをみすくすこゝらのとしころの心さしをみしり給はすあり
けるかないと思のまゝならむ人はいまゝてもたちとまるへくやはあるよしかの
さうしみはとてもかくてもいたつら人とみえ給へはおなしことなりをさなき人
　くもいかやうにもてなし給はむとすらむとうちなけきつゝかのまきはしらを
み給にてもをさなけれと心はへのあはれに恋しきまゝにみちすから涙をしのこ
ひつゝまうて給へれはたいめむし給へくもあらすなにかたゝ時にうつる心のい
まはしめてかはり給にもあらすとしころ思うかれ給さまきゝわたりてもひさし

くなりぬるをいつくをまた思ひなをるへきおりとかまたむいとゝひか　くしき
さまにのみこそみえはて給はめといさめ申給ことはりなりいとわか　くしき心
ちもし侍かなおもほしすつましき人　くも侍れはとのとかに思侍ける心のをこ
たりをかへす　くきこえてもやるかたなしいまはたゝなたらかに御らんしゆる
してつみさりところなうよ人にもことはらせてこそかやうにもゝてない給はめ
なときこえわつらひておはすひめ君をたにみたてまつらむときこえ給へれとい
たしたてまつるへくもあらすおとこきみたち十なるは殿上し給いとうつくし人
にほめられてかたちなとようはあらねといとらう　くしう物の心やう　くしり
給へりつきの君は八はかりにていとらうたけにひめ君にもおほえたれはかきな
てつゝあこをこそは恋しき御かたみにもみるへかめれなとうちなきてかたらひ
給宮にも御気色給はらせ給へとかせをこりてためらひ侍程にてとあれははした
なくていて給ぬこきんたちをは車にのせてかたらひおはす六条殿にはえゐてお
はせねはとのにとゝめてなをこゝにあれきてみにも心やすかるへくとの給うち
なかめていと心ほそけにみをくりたるさまともいとあはれなるにもの思くはゝ
りぬる心地すれと女きみの御さまのみるかひありてめてたきにひか　くしき御
さまを思くらふるにもこよなくてよろつをなくさめ給うちたえてをとつれもせ
すはしたなかりしにことつけかほなるを宮にはいみしうめさましかりなけき給
はるのうへもきゝ給てこゝにさへうらみらるゝゆへになるかくるしきことゝな
けき給をおとゝの君いとおしとおほしてかたき事なりをのか心ひとつにもあら
ぬ人のゆかりに内にも心をきたるさまにおほしたなり兵部卿の宮なともえし給
ときゝしをさいへと思やりふかうおはする人にてきゝあきらめうらみとけ給に
たなりをのつから人のなからひはしのふることゝ思へとかくれなき物なれはし
かおもふへきつみもなしとなん思侍との給かゝることゝものさはきにかむの君
の御けしきいよ　くはれまなきを大将はいとおしと思あつかひきこえてこのま
いり給はむとありしこともたえきれてさまたけきこえつるをうちにもなめく心
あるさまにきこしめし人　くもおほすところあらむおほやけ人をたのみたる人
はなくやはあると思かへしてとしかへりてまいらせたてまつり給おとこたうか
ありけれはやかてその程にきしきいといまめかしくになくてまいり給かた　く
のおとゝたちこの大将の御いきをひさへさしあひ宰相中将ねんころに心しらひ
きこえ給せうとのきみたちもかゝるおりにとつとひついせうしよりてかしつき
給さまいとめてたし承香殿のひんかしおもてに御局したりにしに宮の女御はお
はしけれはめたうはかりのへたてなるに御心の中ははるかにへたゝりけんかし

御方　くいつれとなくいとみかはし給てうちわたり心にくゝおかしきころをひなりことにみたりかはしきかういたちあまたもさふらひ給はす中宮こき殿の女御この宮の女御左大殿のゝ女御なとさふらひ給さては中納言さい将の御むすめふたりはかりそ候給けるたうかはかた　くにさと人まいりさまことにけににきわゝしきみ物なれはたれも　くきよらをつくし袖くちのかさなりこちたくめてたくとゝのへ給春宮の女御もいとはなやかにもてなし給てみやはまたわかくおはしませとすへていといまめかし御前中宮の御方すさく院とにまいりてよいたうふけにけれは六条の院にはこのたひは所せしとはふき給朱雀院よりかへりまいりて春宮の御方　くめくるほとによあけぬほの　くとおかしきあさほらけにいたくえひみたれたるさましてたけかはうたひける程をみれはうちの大殿のきんたちは四五人はかり殿上人のなかにこゑすくれかたちきよけにてうちつゝき給へるいとめてたしわらはなる八らう君はむかひはらにていみしうかしつき給かいとうつくしうて大将とのゝ大らう君とたちなみたるをかむのきみもよそ人とみ給はねは御めとまりけりやむことなくましらひなれ給へる御かた　くよりもこの御つほねの袖くちおほかたのけはひいまめかしうおなしものゝ色あひかさなりなれとものよりことにはなやかなりさうしみも女房たちもかやうに御心やりてしはしはすくい給はましとおもひあへりみなおなしことかつけわたすわたのさまもにほひかことにらう　くしうしない給てこなたはみつむまやなりけれとけはひにきはゝしく人　く心けさうしそしてかきりあるみあるしなとのことゝもゝしたるさまことにようゐありてなむ大将殿せさせ給へりけるとのゐところにゐ給てひゝとひきこえくらし給ことはよさりまかてさせたてまつりてんかゝるついてにとおほしうつるらん御宮つかへなむやすからぬとのみおなしことをせめきこえ給へと御かへりなしさふらふ人　くそおとゝの心あはたゝしき程ならてまれ　くの御まいりなれは御心ゆかせ給はかりゆるされありてをまかてさせ給へときこえさせ給しかはこよひはあまりすか　くしうやときこえたるをいとつらしと思てさはかりきこえし物をさも心にかなはぬよかなとうちなけきてゐ給へり兵部卿の宮御前の御あそひに候給てしつ心なくこの御つほねのあたり思やられ給へはねんしあまりてきこえ給へり大将はつかさの御さうしにそおはしけるこれよりとてとりいれたれはしふ　くにみたまふ

　みやま木にはねうちかはしゐる鳥のまたなくねたき春にもあるかなさへつるこゑもみゝとゝめられてなんとありいとおしうおもてあかみてきこえんかたなく思ゐ給へるにうへわたらせ給月のあかきに御かたちはいふよしなくきよら

にてたゝかのおとゝの御けはひにたかふところなくおはしますかゝる人は又もおはしけりとみたてまつり給かの御心はへはあさからぬもうたてもの思くはゝりしをこれはなとかはさしもおほえさせ給はんいとなつかしけに思しことのたかひにたるうらみをの給するにおもてをかんかたなくそおほえ給やかほをもてかくして御いらへもえきこえたまはねはあやしうおほつかなきわさかなよろこひなとも思しり給はんと思ふことあるをきゝいれ給はぬさまにのみあるはかゝる御くせなりけりとの給はせて

なとてかくはひあひかたきむらさきを心にふかく思ひそめけむこくなりはつましきにやとおほせらるゝさまいとわかくきよらにはつかしきをたかひ給へるところやあると思なくさめてきこえ給宮つかへのらうもなくてことしかゝいし給へる心にや

いかならん色ともしらぬむらさきを心してこそ人はそめけれいまよりなむ思給へしるへきときこえ給へはうちえみてそのいまよりそめ給はんこそかいなかへいことなれうれふへき人あらはことはりきかまほしくなむといたううらみさせ給御けしきのまめやかにわつらはしけれはいとうたてもあるかなとおほえておかしきさまをもみえたてまつらしむつかしきよのくせなりけりと思にまめたちてさふらひたまへはえおほすさまなるみたれこともうちいてさせたまはてやう　くこそはめなれめとおほしけり大将はかくわたらせ給へるをきゝ給ていとゝしつ心なけれはいそきまとはし給身つからもにけなきこともいてきぬへき身なりけりと心うきにえのとめ給はすまかてさせ給へきさまつき　くしきことつけともつくりいてゝちゝおとゝなとかしこくたはかり給てなん御いとまゆるされ給けるさらは物こりしてまたいたしたてぬ人もそあるいとこそからけれ人よりさきにすゝみにし心さしのひとにをくれてけしきとりしたかふよむかしのなにかしかためしもひきいてつへき心地なむするとてまことにいとくちおしとおほしめしたりきこしめしゝにもこよなきちかまさりをはしめよりさる御心なからんにてたにも御らんしすくすましきをまいていとねたうあかすおほさるされとひたふるにあさきかたにおもひうとまれしとていみしう心ふかきさまにの給契てなつけ給もかたしけなう我はわれと思ものをとおほす御てくるまよせてこなたかなたの御かしつき人とも心もとなかり大将もいと物むつかしうたちそひさはき給まてえおはしましはなれすかういときひしきちかきまもりこそむつかしけれとにくませ給

九重にかすみへたては梅のはなたゝかはかりも匂ひこしとやことなること

なきことなれとも御ありさまけはひをみたてまつる程はおかしくもやありけんのをなつかしみあかいつへきよをおしむへかめる人も身をつみて心くるしうなむいかてかきこゆへきとおほしなやむもいとかたしけなしとみたてまつる

かはかりは風にもつてよはなのえにたちならふへきにほひなくともさすかにかけはなれぬけはひをあはれとおほしつゝかへりみかちにてわたらせ給ぬやかてこよひかのとのにとおほしまうけたるをかねてはゆるされあるましきによりもらしきこえ給はてにはかにいとみたりかせのなやましきを心やすき所にうちやすみ侍らむ程よそ　くにてはいとおほつかなく侍らむをとおいらかに申ない給てやかてはたしたてまつり給ちゝおとゝにはかなるをきしきなきやうにやとおほせとあなかちにさはかりのことをいひさまたけんも人の心をくへしとおほせはともかくももとよりしたいならぬ人の御ことなれはとそきこえ給ける六条殿そいとゆくりなくほいなしとおほせとなとかはあらむ女もしほやくけふりのなひきけるかたをあさましとおほせとぬすみもていきたらましとおほしなすらへていとうれしく心ちおちゐぬかのいりゐさせ給へりしことをいみしうえしきこえさせ給も心つきなくなを　くしき心ちしてよには心とけぬ御もてなしいよ　くけしきあしかの宮にもさこそたけうの給しかいみしうおほしわふれとたえてをとつれすたゝ思ことかなひぬる御かしつきにあけくれいとなみてすくし給二月にもなりぬ大殿はさてもつれなきわさなりやいとかうきは　くしうとしも思はてたゆめられたるねたさを人わろくすへて御心にかゝらぬおりなく恋しう思いてられ給すくせなといふものをろかならぬことなれとわかあまりなる心にてかく人やりならぬものは思そかしとおきふしおもかけにそみえ給大将のおかしやかにわらゝかなるけもなき人にそひゐたらむにはかなきたはふれこともつゝましうあいなくおほされてねんし給をあめいたうふりていとのとやかなるころかやうのつれ　くもまきらはし所にわたり給てかたらひ給しさまなとのいみしうこひしけれは御ふみたてまつり給右近かもとにしのひてつかはすもかつは思はむことをおほすになにこともえつゝけ給はてたゝおもはせたることゝもそありける

かきたれてのとけき比の春雨にふるさと人をいかにしのふやつれ　くにそへてうらめしう思いてらるゝことおほう侍をいかてかわきゝこゆへからむなとありひまにしのひてみせたてまつれはうちなきてわか心にも程ふるまゝに思いてられ給御さまをまほに恋しやいかてみたてまつらんなとはえの給はぬおやにてけにいかてかはたいめもあらむとあはれなり時　くむつかしかりし御けしき

を心つきなう思きこえしなとはこの人にもしらせたまはぬことなれは心ひとつにおほしつゝくれと右近はほのけしきみけりいかなりけることならむとはいまに心えかたく思ける御返きこゆるもはつかしけれとおほつかなくやはとてかき給

なかめする軒のしつくに袖ぬれてうたかた人をしのはさらめや程ふるころはけにことなるつれ　くもまさり侍けりあなかしことゐや　くしくかきなし給へりひきひろけてたま水のこほるゝやうにおほさるゝを人もみはうたてあるへしとつれなくもてなし給へとむねにみつ心ちしてかのむかしのかむの君を朱雀院のきさきのせちにとりこめ給しおりなとおほしいつれとさしあたりたることなれはにやこれはよつかすそあはれなりけるすいたる人は心からやすかるましきわさなりけりいまはなにゝつけてか心をもみたらましにけなき恋のつまなりやとさましわひ給て御ことかきならしてなつかしうひきなし給しつまをとおもひいてられ給あつまのしらへをすかゝきてたまもはなかりそとうたひすさひ給も恋しき人にみせたらはあはれすくすましき御さまなり内にもほのかに御らんせし御かたちありさまを心にかけ給てあかもたれひきいにしすかたをとにくけなるふることなれと御ことくさになりてなむなかめさせ給ける御文はしのひ

くにありけり身をうき物に思しみ給てかやのすさひことをもあいなくおほしけれは心とけたる御いらへもきこえ給はすなをかのありかたかりし御心をきてをかたかたにつけておもひしみ給へる御ことそはすられさりける三月になりて六条とのゝ御前のふち山ふきのおもしろきゆふはへをみ給につけてもまつみるかひありてい給へりし御さまのみおほしいてらるれは春の御前をうちすてゝこなたにわたりて御らむすくれたけのませにはさとなうさきかゝりたるにほひいとおもしろしいろに衣をなとの給て

思はすにいてのなかみちへたつともいはてそこふる山ふきのはなかほにみへつゝなとの給もきく人なしかくさすかにもてはなれたることはこのたひそおほしけるけにあやしき御心のすさひなりやかりのこのいとおほかるを御らんしてかんしたち花なとやうにまきらはしてわさとならすたてまつれ給御文はあまり人もそめたつるなとおほしてすくよかにおほつかなき月日もかさなりぬるをおもはすなる御もてなしなりとうらみきこゆるも御心ひとつにのみはあるましうきゝ侍れはことなるついてならてはたいめむのかたからんをくちおしう思給るなとおやめきかき給て

おなしすにかへりしかひのみえぬかないかなる人かてにゝきるらんなとか

さしもなと心やましうなんなとあるを大将もみたまひてうちわらひて女はまことのおやの御あたりにもたはやすくうちわたりみえたてまつり給はむことついてなくてあるへきことにあらすましてなそこのおとゝのおり　く思ひはなたすうらみことはし給とつふやくもにくしときゝ給御返こゝにはえきこえしとかきにくゝおほいたれはまろきこえんとかはるもかたはらいたしや

すかくれてかすにもあらぬかりのこをいつかたにかはとりかくすへきよろしからぬ御けしきにおとろきてすき　くしやときこえ給へりこの大将のかゝるはかなしことといひたるもまたこそきかさりつれめつらしうとてわらひ給心のうちにはかくらうしたるをいとからしとおほすかのもとのきたの方は月日へたゝるまゝにあさましとものを思しつみいよ　くほけしれてものし給大将とのゝおほかたのとふらひなに事をもくはしうおほしをきてきむたちをはかはらす思ひかしつき給へはえしもかけはなれ給はすまめやかなるかたのたのみはおなしことにてなむものし給けるひめ君をそたえかたく恋きこえ給へとたえてみせたてまつり給はすはかき御心のうちにこのちゝ君をたれも　くゆるしなううらみきこえていよ　くへたて給こととのみまされは心ほそくかなしきにおとこ君たちはつねにまいりなれつゝかむのきみの御ありさまなとをもをのつからことにふれてうちかたりてまろらをもらうたくなつかしうなんし給あけくれおかしきことをこのみてものし給なといふにうらやましうかやうにてもやすらかにふるまう身ならさりけんをなけき給あやしうおとこ女につけつゝ人に物を思はするかむのきみにそおはしけるそのとしの十一月にいとおかしきちこをさへいたきいてたまへれは大将も思やうにめてたしともてかしつき給ことかきりなしそのほとのありさまいはすとも思ひやりつへきことそかしちゝおとゝもをのつから思やうなる御すくせとおほしたりはさとかしつき給きむたちにも御かたちなとはおとり給はすとうの中将もこのかむの君をいとなつかしきはらからにてむつひきこえ給ものからさすかなる御けしきうちませつゝ宮つかひにかひありて物し給はまし物をとこのはか君のうつくしきにつけてもいまゝてみこたちのおはせぬなけきをみたてまつるにいかにめいほくあらましとあまりのことをそ思ての給おほやけことはあるへきさまにしりなとしつゝまいり給ことそやかてかくてやみぬへかめるさてもありぬへきことなりかしまことやかのうちのおほいとのゝ御むすめのないしのかみのそみしきみもさるをゝくせなれはいろめかしうさまよふ心さへそひてもてわつらひ給女御もついにあわ　くしきことこの君そひきいてんとゝもすれは御むねつふし給へとおとゝのいまはなましらいそとせいし

の給をたにきゝいれすましらひいてゝものし給いかなるおりにか有けむ殿上人
あまたおほえことなるかきりこの女御の御かたにまいりて物のねなとしらへな
つかしき程のひやうしうちくはへてあそふ秋のゆふへのたゝならぬに宰相の中
将もよりおはしてれいならすみたれてものなとの給を人　くめつらしかりてな
を人よりことにもとめつるにこのあふみの君人　くのなかをゝしわけていてゐ
給あなうたてやこはなそとひきいるれといとさかなけにゝらみてはりゐたれは
わつらはしくてあふなきことやの給いてんとつきかはすにこのよにめなれぬま
め人をしもこれそなゝとめてゝさゝめきさはくこゑいとしるし人　くいとくる
しと思にこゑいとさはやかにて
　興津ふねよるへなみ路にたゝよはゝさほさしよらむとまりをしへよたなゝ
しをふねこきかへりおなし人をやあなはるやといふをいとあやしうこの御方に
はかうようゐなきことききこえぬものをと思まはすにこのきく人なりけりとおか
しうて
　よるへなみ風のさはかす舟人も思はぬかたにいそつたいせすとてはしたな
かめりとや